

中山義秀全集

第九卷



二つの生涯
私の文壇風月 他

新潮社版

中山義秀全集

第九卷

新潮社版



© Tetsuya Akada, Reiko Yamamoto and
Himeko Nakayama, 1972, Printed in Japan.

中山義秀全集 第九卷

發行 昭和四十七年四月十日
セット版 昭和五十一年八月三十日

セット定價 二七〇〇〇圓

著者 中山義秀

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一、電話
業務東京二六六一五一一、編
集二六六一五四一一、郵便番號
一六二、振替東京四一八〇八

印刷所 塚田印刷株式會社
製本所 神田加藤製本

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
擔にてお取替へいたします。

中山義秀全集第九卷 目次

「二つの生涯」

母の墓碑銘	九
歴史の一里塚	一六
壺の碑	一九
時のあし音	二二
昔のこと	二三
花の諷示	二四
廢墟の人生	二六
酒	三〇
金峯の山峽	三二
時の祕密	三三
二・二六事件の插話	三五

ドライな新年	三七
花酔	三九
淡雪	四〇
奥路の花	四一
男を救ひうるもの	四二
結城親朝のこと	四五
同窓會	四六
二つの生涯	四七
敗戦四日間	五〇
旅支度	五二
天目山	五三
求道の詩人光太郎	五五
青年文學者	五七

「義秀花暦」

厚物咲の頃

碑の頃

寂光の人の頃

臺上の月の頃

「私の文壇風月」

I

私の文壇風月

菊日和

文學碑

思ふがままに

箱根問答

風に鳴る文章

賢人

芭蕉に事よせて

碑

咲庵

詩人の孤獨

澤東綺譚

II

南歐の秋

秋から春

我がつれづれ

猿ヶ京

一七五

一七八

一八〇

一八三

一八四

一八五

一八六

一八八

一八八

一九〇

一九三

一九九

二〇八

二二三

小やかな會合	二二八
悲母昇天	二三三
六十路	二三〇
還暦の人生觀	二三三
六十五歳の春	二三三
騒がしい曙	二三五
鴉	二三六
あまり者	二三六
消夏漫筆	二四〇
音の奇蹟	二四一
東洋に輝く聖火	二四四
山峽	二四五
山中問答	二四七
神々の招待	二四九
Ⅲ	

歴史の春秋	二五一
河野廣中と明治政府の奥羽政策	二六五
山國の禪僧	二七五
昔の夢	二八〇
古刀	二八二
古城の秋	二八五
冬枯れの暖國	二八七
甲州の秋	二八八
「滿庭の菊」	
六五の春	
白河の關	二九一
風にのる種子	二九五

六五の春

二九六

晝の月

三二九

缺け皿

二九八

★

私の文學碑

三〇三

偲ばれる人々

刀の花實

三三一

未開の人生

三〇四

鹿島の祕太刀

三三五

偲ばれる人々

三〇〇

私の履歷書

三六四

十二月三十日

三二七

いしぶみの秋

三九六

里見淳の『内證事』

三二八

芭蕉、良寛、荷風

三九八

満庭の菊

「咲庵」以後

四〇〇

ガン體驗者の報告

三二九

飛花落葉

四〇三

月のまどかなる日

三三三

老優

四〇五

消えない足跡

三三四

松尾桃青

四〇六

満庭の菊

三三七

○

「電光」後記

四〇

「碑」後記

四一

「柘植の日記」後記

四二

「荒海」前書

四三

「結婚」後記

四三

鎌倉文庫版「厚物咲」後記

四四

「春風を嘆く」後記

四五

「迷路」後記

四七

「酒屋」後記

四八

「なすな戀」後記

四九

「信夫の鷹」後記

四九

「テニヤンの末日」後記

四二

「少年死刑囚」後記

四三

「花園の思索」後記

四三

「壽永の春」後記

四三

「落日」後記

四四

角川文庫版「美しき囃」(下巻)後記

四四

「義秀花暦」後記

四五

「芭蕉庵桃青」附記

四五

○

對談 人生凝視(永井龍男・中山義秀)

四六

*

解説

八木義徳 四六五

解題

四七四

年譜

四七九

中山義秀全集 第九卷

「二つの生涯」

母の墓碑銘

一

六十歳になつて、まだ母があるといふのは、幸福なことだと、妻が時にもらすことがあつた。家内は幼少の時分、母をうしなつてゐるから、とくにさう感じるのであらう。母は明治十年一月十日の生れである。今年満八十二歳になる。かぞへて二十三歳の時、私を生んだ。私に五歳年長の兄があつたから、十六、七歳の頃、父と結婚したことになる。

母の生れる前の年の明治九年六月、明治天皇東北巡幸の際の新聞記事に、

「六月十三日午前七時蘆野驛（栃木縣那須郡蘆野町）御發輦、八時過ぎ寄居村にて御小休あらせられし佐藤勝次郎の後園は、惟巖奇石山をなしその間には躑躅を多く植込みて、花盛りには心なき旅人だに餘所に見過す者なし。折節今日を盛りに咲満ちたるは、稀の行幸を待奉りしにやと見ゆ」（六月十七日、「東京曙新聞」）

これが母の生家である。江戸街道に沿うた宿場の本陣で、屋號を柏屋といつたさうだが、私は行つてみたことがない。奥羽の大小名が、江戸参観の上り下りに宿泊したところで、庭園は五十三次をかたどつて造られ、宿の二階から庭を流れる河に絲をたれて、釣を樂しむことができたといふ。

明治戊辰の役に白河口を攻めた官軍の先鋒が、寡兵のためやぶれて夜分寄居村に退却してきた。負傷者の手當をしようと思つたが、村の何處の家も追けてしまつて人影がない。

柏屋を叩きおこすと、祖母の女將が一人起きだしてきて宿をひきうけ、多勢の奉公人を指揮して、負傷者の手當や官兵の食事を世話した。そのため戦後、官から褒賞をうけたと母に聞かされたことがある。私はこの祖母も知らないが、氣丈な人だつたらしい。

鐵道が通じるやうになつて寄居宿は廢驛となり、柏屋は没落してしまつた。それから母の苦難の生活が始まる。母

は祖母と一緒に姉の嫁ぎ先にひきとられて子守に使はれ、祖母と二人で駄菓子子の箱を背負ひ、村々を賣りあるいたこともあつたさうだ。十三、四歳の頃であらう。

その後白河地方裁判所の検事の家に女中にすみこみ、勤めの餘暇絲をとつて祖母にみついだ。絲をとるといふのは、繭を釜の熱湯につけて絲口をほぐし、手車で生絲をつむぐことである。

父と結婚してからその生活は、決して樂ではなかつた。父方の家は代々水戸の支藩石岡の家中で、福島縣岩瀬郡長沼町にあつた陣屋の目付をやつてゐた。父の父又十郎種高は大太といふ當主の次男で、水戸の劍道師範の家へ養子にやられたが、家附娘の死後養家を離縁となり、牢人して江戸の内外を徘徊してゐるうち、水戸の天狗黨にさそはれ、筑波の擧兵に参加した。その後筑波をおちて故郷近くへ遁げかへり、白河市の北三里ばかりの所にある、會津街道沿ひの宿場、隈戸村の問屋鈴木家の寡婦と一緒にゐた。四人の子供が生れ、父はその次男にあたる。

問屋もまた時勢の變遷で、没落してしまつた。父は炭を焼いてえた金を、ひそかに土中に埋めて貯蓄し、東京までの汽車賃ができると、それを懷に家を脱走して上京したが、思ふやうな職にありつけず數日間飲まず喰はずで故郷に歸つてきた。父は母より七つ年長だから、母と結婚した時は

二十三、四歳、一里餘はなれた部落の水車小屋をかりて、夫婦共々骨身を惜しまず働いた。

私達兄弟が生れたのは、この河端の水車小屋である。村から十町餘はなれた、杉森の中の一つ家だつた。私にもし孤獨な性があるとすれば、かういふ一つ家に生れそだち、その後も縣内の町々を轉々して、眞に土著人としての誇も安定感も、また人々との附合ひも持たなかつたことによるかとも思はれる。

兩親が私達兄弟をつれて一家四人、この村をでたのは私が小學一年生の夏であつた。出郷の理由は、二人の子供達を教育するためといふことだつた。父も母も學校教育といふものを、ろくすつぼううけてゐない。

それでも母は子守しながら三、四年間村の小學校へ通つたといふことで、文字をよく知らない父にびつくりして、私はこんな人と一緒になつたのかなあと、結婚當初ひどく心細く思つたさうである。

父方の問屋と母方の柏屋は、親戚關係にあつたから、その縁で二人は結ばれたのだが、父も母も無學の悲しさが身にしみ、せめて二人の子供達ばかりでも、人並の教育をうけさせようと、村をでる氣になつたのだと云ふ。

兩親はその當時、べつに生活に困つてゐたわけではなかつた。逆に水車稼業でえた零細な金をためて村人に貸しつ

け、他郷にでても路頭に迷ふことのないやう、萬全の準備をととのへての上での決心であつた。

貧苦に鍛へられた父は、その點じつに用心深かつた。父は成功してから一生涯、贅澤といふものを味はずに終つた。少年時代の私達兄弟も同様である。父は私といふ浪費好きな、向うみずの子供の將來を心配しながら、それでも私は幸福だつたとつぶやいて、二十數年前私に手をとられたまま亡くなつた。一人の兄はそのまた五年前に夭折してゐる。

私は、五十餘年前、わづかな家財を二頭の馬につみ、八つと十三歳になる私達兄弟を、その背にのせて村をでた時の光景を、今なほとびとびに記憶してゐる。

故郷の村から白河の驛まで三里餘の沿道、いたるところ親戚や知人の家があつた。それ等の人々が私達の馬をとめて、兩親としきりに名残りを惜しんでゐる。

「身寄りもない他郷へ出てゆき、又困つたなぞと云つて、村さ戻つてくるぢやねいだぞ」

「はア、そこは安心してくらつせ。身を粉にしても、やり通してみせつから」

母が親戚の女達と互に涙をしぼりながら、このやうな會話をかはしてゐたことも忘れない。子供の私達兄弟はもとより、村をでることに何の悲しみもかんじなかつた。私達兄弟は「車の謙、秀」とよばれ、傳來の田地も財産もない

ため、親戚や村人から輕蔑をうけ友達もなかつた。

汽車を知らない私達は、それに乘つて遠い旅ができるといふ、唯それだけの喜びと期待に、すつかり有頂天になつてゐた。おそらくさうした無心な兄弟の姿も、人々の涙をさそつたのであつたらう。

私達が眞に故郷をなつかしく思ふやうになつたのは、太平洋海岸にちかい磐城の平町に移つてからのことだ。磐城線がまだ通じてゐなかつた時分で、私達は東北本線を迂回して其處へいつた。

父母が平町をえらんだのは、その炭坑の景氣がよく、子供を進學させる中學校がある、といふ理由からばかりではなくて、なまじひに故郷にちかい町だと、生活にゆき詰つた際歸郷したくなる誘惑に、うちかつつもりだつたに違ひない。

兄は無口で穩しかつたが、私は腕白者だつたので、學校の上級生からよく苛められた。これは他の町々の學校に移つた後も同様だつた。それで友達といふ友達も、えられなかつたのであらう。

私と兄とは毎日のやうに、驛の背後にある城山にのぼつて、トンネルを出入する汽車の煙を追ひながら、故郷の村をなつかしんで、孤獨な生活をおくつた。後年私は市とかはつた平へゆき、城山にのぼつてそのあたりの様子が一變

してしまつてゐるのを知り、何ともいへぬ思ひにおそれられたことがある。

無學な父は炭坑でも町でも望む職につけないため、附近の村々をまはつて屑鹵を買ひ、母がそれを絲にとつたりして、生計の道をたてた。その際父母が先祖から傳はつた品物も、すつかり賣り拂つてしまつた。

父は次男坊なので、後嗣ぎのない中山家の夫婦養子となつた。養父を廣胖といひ、侍あがりのため暮しにうとく、晩年は父母の厄介になつてゐた。

碁が唯一の楽しみで賭け碁にこり、いかさま師にだまされて、よく金をしぼりとられた。その金を父に請求して、父が出ししぶると、すぐ刀をひき抜いておどかす。

廣胖は藩の小天狗と云はれた弟の代次が、明治五年舊八月一日、錯亂して母を斬り殺した際、すぐ駈けつけて激闘の末やうやく弟をしとめた。さういふ凄い經歷があるので、父は養父を恐れてゐた。

それで養父が刀をとりだすと、足裏を空さまにしていつさんに家から逃げだす。その無抵抗ぶりが、母には齒がゆく思はれてならなかつたさうである。

この父も養父の借金を拂ひかねて、悲壯な決心をしたことがあつた。三人のいかさま師に借金を督促され、父はよぎなく町へ出かけて行つた。

宿屋の二階で待つてゐた三人にむかひ、札束らしく見せかけた、新聞紙の風呂敷包を示しながら、證文を見せろといつて養父の借用證をうけとり、やにはに引裂いて火鉢にくべると、この野郎、何をする、とばかり三人がたちあがつた。その瞬間父が隠しもつた仕込杖をひきぬくと、三人は仰天して座敷から逃げだし、屋根から飛びおりたり階段から轉げおちたりして、逃げうせてしまつた。

父母が賣拂つた品物は、この廣胖が形見の品物や珍しい古書籍、母がうけついだ諸大名の色紙帖や蒔繪の調度品である。

二

父母は平町の生活に見きりをつけて、郡山町に移り二本松にひっこして、山林の賣買や薪炭の仲買ひをはじめ、やうやく成功の絲口をつかんだ。

ところが生憎兄は病に倒れて、進學を斷念しなければならなくなり、私一人が兩親の希望となつた。私は郡山の中學へ入學して寄宿舎へ入り、はじめて父母の膝下をはなれたが、生れおちるとから一家四人、いづれも他郷で孤獨な生活をおくつてきたため、父母や兄が戀しくてならない。

むだな金を使ふと父が怒るので、毎土曜日になると汽車

にのらずに六、七里の道を歩いて父母の家にかけり、後には病氣になつて休學するやうな始末。それで一家はふたたび、郡山へひき移つてきた。

中學五年生の頃、上級校入學の準備中、私は友達にさそはれて酒、煙草をのみ、茶屋遊びをおぼえた。相手は半玉で三昧をきいたり、歌つたりするだけの他愛のない遊びだが、両親にとつては心配でたまらない。

毎夜のやうに家をとびだす私の行方をたづねて、夫婦で花街内をあるきまはり、茶屋の歌聲をきいて、あれは三昧線によくあふから、家の息子達ではあるまいと、語りあつたさうだが、十七、八歳の思春期の情熱にあふれる頃、いちばん危険な年齢でもあつた。

それに私は人一倍、感情の動搖がはなはだしい。この年頃の時には興奮すると目まひがして、倒れさうになることがあつた。かうした感情的な氣質は、父よりも母の血を多分にうけつたのではないかと思つてゐる。

私は父とよく衝突したが、いつも私をかばつてくれるのは母であつた。母は感情過多の私を、自分をあはれむやうに憐んだのであつたかも知れない。

「東京へゆくまでの辛抱だ。我慢しなさい」

さう云つて母は私を、なだめすかした。私は退校にもならず、中學をでて、早稻田の文科に入った。そして横光利

一を知つたことが、やがて私の一生を決定する、運命の星となるわけだが、私は在學中はやくも一人の女性を戀して、將來を誓ふやうになつた。

私はその女性と結婚するため、都落ちして伊勢の津中學に就職することになった。そこで初めて女性のことを父母に告白すると、

「それで、お前の將來も終りだ」

と父がさも落膽したかのやうに、呟いたことをおぼえてゐる。二十三、四歳の若さで妻をもてば、身の自由がきかなくなるのを承知だつたからであらう。父の過去は舵もない小舟に妻子をのせて、荒海の中を漂つてきたやうなものだつたから――。

しかし、私の長男が生れたその年の七月、両親は伊勢參宮や上方見物かたがた、津市の私達の新居にやつてきて、一月あまり滞在した。いづれも山家育ちの両親は、毎日辨當をもつて阿漕の浦へ泳ぎに行つた。父は數へて五十四歳、母は四十七歳、子供のやうに海の遊びを喜んでゐた。

村を出てからさうした喜びにひたつたのは、十六年ぶりである。しかも自分達の努力で、ともかくも私を一人前に育てあげ、かねての念願を達したわけだから、内心どんなに満足だつたか推測するに難くはない。私はそれから三十數年たつた今なほ、父母ののびのびと楽しんでゐたその折

の姿をありありと思ひうかべることができる。また兩親の喜びが、どんなに純粹だったかといふことも。

九月一日、私は歸宅する兩親のため、汽車の切符を買ひにいつて、關東大震災火災のことを知った。材木商を業としてゐた父にとつては、金儲けする絶好の機會である。また鮮人騒ぎも大きく傳へられるやうになり、父母は留守宅のことを心配したが、汽車不通でいかんとも仕方がない。

十日餘おくれで兩親は歸宅したが、それがかへつて仕合せになつた。いちはやく山林を買ひしめた同業者等は、米國から材木が輸送されてきたため、相場が暴落して破産してしまつたからである。

兩親と兄夫婦の一家は、その後白河市に新しく家をたてて郡山市からひき移つた。父が六十歳になつたかならない、ちやうど現在の私と同じぐらゐの年齢である。

新居附近の田地を買ひあつめ、老後や死後の心配もなくなり、父母ははじめて安らかに晩年をおくられる身の上となつた。兄が病身だつたことと私の上をのぞいては、もはや何の苦勞もない。その奮闘と忍耐によつて、父母なりの收穫を酬いられた次第である。

しかし、それも僅かな間のこと、家督の兄に死なれると、父はすつかり氣を落してしまつたかのやうであつた。その上私は勝手に教師をやめたり、蹴られたりしてすこしも父

を安心させない。

私が妻を喪つた昭和十年の秋、

「人間に魂といふものはあるものか」

さういふ謎のやうな質問を私にだした後、父は數へ年六十六歳で亡くなつた。

私はこれまでに、近親九人の死を見送つてゐる。三人の子と妻とその家族二人、兄と父とそして今度の母の死。數少い友人も次々と去つてゆく。私は哀しみと死に、馴れてしまつたやうなものだ。

誰でも云ふことだが、人生は過ぎてみると、じつにあつけない。若い頃互に相競つた仲間でも、みな同じ時に流され、一様に老いてゆくのをみると、人知れずその安否を氣づかふやうな心境になり、生きてゆくために拂つた努力や勞苦にたいして、一種の愛情と敬意をいだくやうにさへなる。

肉親の間では、なほさらのことだ。父にたいし兄にたいし母にたいしして、無限のなつかしさをおぼえる。

後から知つたことによると、兩親が村をでたのは、裏面に村人から迫はれた事情もあつたやうである。父母は大川端の水車屋から村内に移り、村の上水を利用して新しく水車業を営んだ。

その水利權について、一部の村人から異議を申立てられ、